

60周年を迎えての抱負は？

未来に向けて持続的成長を

15日で創立60周年の節目を迎えた大成ロテック。西田義則社長は新型コロナウイルス感染症の流行などを踏まえて「大変な年に60周年を迎えたが、その中でも未来に向けて持続的成長を遂げたい」と語る。将来に向けては「まずは人だ」と強調し、担い手確保と教育、離職者の減少に注力する姿勢を示す。2年後の2023年には、親会社の大成建設も創立150周年を迎える。今後の抱負や取り組みを聞いた。

そとこが聞きたい

「新型コロナウイルスの流行に加え脱炭素やDX（デジタルトランスフォーメーション）、SDGs（持続可能な開発目標）など、新しい価値観が広まり世界全体が大きく変わっている」と現在の状況を評価する。ただ、「想像もできなかったような大変な時代だが、大変なだけでなくチャンスとしても捉えるべきだ。今以上に激動の時代であった幕末・明治を生きた大成建設グループの創業者・大倉喜八郎は、『進一層』（困難に出会って

もひるまずに一層前に進む）という言葉を遺している。この言葉を引き継いで前に進まなければならぬ。誇りと働きがい、そして未来のある会社になろうという気持ちで、次の10年に皆で取り組んでい

く」と述べる。将来に向けた取り組みの柱としては、人材の重要性を訴える。4月からスタートした現中期経営計画でも、「人材の獲得及び育成」は6項目の重点施策のトップに挙げる。「担い手の確保と教育、離職者の減少は一番の課題だ。人が集まってくれる会社になるために、夢をもって生き生きと働ける会社になる必要がある」と話す。

その要となる新3K（給料・休日・希望）の実現については「休日の確保が問題だ。働き方改革を進めて週休2日を成し遂げなければならぬ」との認識を示す。

人材の獲得に向けては、リクルーター制度やリファラル制度を利用して新卒・中途ともに採用活動を強化するほか、働き方の多様化を進めて働きやすい環境を構築し、離職防止を図る。教育面では、若年層を対象としたOJT（職場内訓練）教育の実施や、40〜50歳代前半の職員を対象とした次世代リーダー育成教育などに取り組む。

また、グループ力の強化も重要課題に挙げる。「大成建設グループおよび大成ロテックグループでの連携によるシナジー効果はわれわれの大きな武器なので、さらに強化していく」考え。人的交流の実施や高速道路維持更新工事の大成建設とのJV化、資材の共同調達によるコストダウンなどを具体的な取り組みとして提示する。地域密着型のグループ企業をさらに増やして

いくことも視野に入れる。60周年を契機とした新たな取り組みとしては、組織面では経営課題に迅速かつ幅広く対応するための「社長室」や安全管理管理体制の強化に向けた「安全環境部」を設置。7月には、建築事業の拡大に向け、建設事業本部建築部に「工務室」、各支社工事に「建築室」を設置、各部署へのDX導入を推進・補助する専門部署「DX推進室」の設置も予定している。

研究開発部門では、技術研究所に「新領域研究室」を設け、開発研究室を「生産技術開発室」、先端技術研究室を「先進技術研究室」にそれぞれ改称したほか、第2研究所の設立も計画している。現在は用地の選定を進めている段階だ。「発電ができる舗装や自動車走行中の非接触給電舗装など、将来に向けて夢のある技術を実現するための実証設備も備えた施設にする」と展望を語った。



大成ロテック社長

にしだ よしりの
西田 義則氏